

中里介山は、青年時代から独身を貫く決心をしていた。二十七歳の時、勤務先の都新聞社で独身会を結成し機関誌「独身」を発行している。好男子であったので女性には大変もてたと言うが終生妻は娶らなかつた。評論家北島広敏によれば幼少のころ味わつた家庭の暗さがトラウマになつてゐるからという。介山の言「女遊びは構わない、それは魂を傷つけぬから。恋はいけない、魂をきずつけるから」。晩年まで簡素でストイックな生活を貫いた。「大菩薩峠」がベストセラーになつて得た印税は事業につき込み、「本人は菜食を中心とする粗食で、住まいは六畳一間しかなかった。



中里介山妙音谷草庵之碑

『大菩薩峠』は一九一三年（一九四一年に都新聞・毎日新聞・読売新聞などに連載された四十一巻にのぼる未完の一巨大編。幕末が舞台で、虚無にとりつかれた剣士・机竜之助を主人公とし、甲州大菩薩峠に始まる彼の旅の遍歴と周囲の人々の様々な生き様を描く。連載は約三十年にわたり、話は幕末から明治に入らずに架空の世界へと迷い込み、作者の死とともに未完に終わった。作者は「大乘小説」と呼び、仏教思想に基づいて人間の業を描こうとした。世界最長を目指して執筆された時代小説で、大衆小説の先駆けとされる不朽の傑作である。

◇散歩のみどころ

JR高尾駅から新旧甲州街道を歩き、高尾山麓の中里介山草庵の碑まで凡そ5kmの行程。

駅から甲州街道、南浅川の敷島橋を渡り左へ折れる道が旧甲州街道。少し歩くとでんでん淵、さらに先の白山橋を左へ渡るとコックス氏住居跡と旧浅川村役場。戻って白山神社、金南寺を参拝。小名路の両界橋を渡り古淵、垂井亭跡や花屋旅館跡を見学。さらに京王線沿いの御室神社、旧浅川地下壕入口へと歩く。

戻って甲州街道から高尾山方面へ。上栢田橋を過ぎた右側に俠客関東綱五郎の住宅跡がある。さらに歩き高尾山近道の道標、野道の先の綱五郎の墓跡を見る。落合橋に戻り、子育地蔵、氷川神社まで歩く。そこから京王高尾駅を通り過ぎ、ケーブルカルー駅へ。琵琶滝道を右に折れ、妙音谷へ。ここには中里介山の碑がある。京王高尾駅まで戻り、解散。

①でんでん淵

廿里町

廿里町を流れる南浅川にでんでん淵という約五十m程の奇岩が見られる場所がある。景勝地と言いたところだが、今や川の両側には住宅が密集していて、散歩すらできない。

「でんでん」という発音だが、この田あめの田が転じ、物の連なるさまや蓮の葉が水面に並び浮かぶさまともいうが、この場所は到底そんな所ではない。昔、石川村（八王子市）と豊田村（日野市）一帯をでんでん原といい、朝倉氏の廃墟跡である。昔、夫人が乳のみ児の姫をあやし、でんでん太鼓を鳴らし子守歌を歌っていたという伝承もあるが、ちなみにこの南浅川のでんでん淵の由来は不明である。岩手県の遠野に、「デンデラ野」という所がある。そこでは、六十歳を過ぎると、僅かな食糧だけを持たされ、死を迎えるまで暮らした所との伝聞がある。



でんでん淵



でんでん淵の上流

② 優しいコックスさん

ポール・コックス氏は、南浅川の白山橋を渡ったすぐ南側に住んでいた。夕方には子犬を連れて高尾山の麓をよく散歩し「優しいコックスさん」の愛称で町の人達に愛されていた。同氏は、都立第二商業学校、都立立川高校の英語教師をしていたが、明治、大正、昭和と親子二代にわたり、わが国の大学、高校などで英文学や英語教育に貢献している。昭和三十三年、昭和女子大学近代文学研究生と三多摩の有志らで、英人コックス親子の記念碑が建てられた。この碑は多摩丘陵御殿峠の多摩養育園の庭にある。碑には昭和女子大人見東明、内藤濯両教授により、次の詩が刻まれている。

「たゆみなく近代文化を移植し
魂乃あけぼのをもたらしした

コックス親子三人

日本の平和と幸福を

とこしえに祈りつづけ

この国土に眠るコックス親子三人
志あるものその徳を慕い

み霊をなぐさめようと

石ぶみを建つこの丘に

あゝ魂はかおる

コックス親子三人

コックス親子は、文明開化の風潮が盛んだった明治九年（一八七六）政府の招きで来日。父親のエドワード・ダグラス氏は旧制の一高や東大で英文学、英語学などの教鞭を執っていた。長男のポール・コックス氏は東京商船学校、慶応義塾、攻玉中学、日本中学、次男のヘンリー・コックス氏は東京経済大学、早稲田大学などで教壇にたっていた。

父親は明治三十八年（一九〇五）千代田区平河町の自宅で永眠、六十一歳。長男のポール氏は太平洋戦争が激しくなった昭和十七年、スコットランドへ強制送還の途中インド洋上で息をひきとった。日本を深く愛し親しんだ彼は、日本から離れることを嫌がったという。

弟のヘンリー氏は、日本女性と結婚し「遍理古楠」と名乗ったが昭和十四年杉並区で死去、六十五歳。
有志らは、ポール氏が戦争の犠牲になり海に眠るのを嘆き、多摩の丘へ三人の御霊を招き慰めたという。
ポール氏の浅川時代の生活は質素なもので、冬服は色のさめた茶色のダブル服に茶色のネクタイ。夏服は白い麻の詰襟服と式日に着るヨウカンの色のフロックコートだけで、それ以外の服を着たのを見たことがなかったという。



府立第二商業学校卒業記念帖より
ポール・コックス氏



コックス親子の碑



コックス氏が住んでいた場所

● 浅川村役場（金南寺）の

火事

明治維新後、明治二十二年（一八八九）二月十一日新政府が樹立され、上柵田村から浅川村が誕生。浅川村役場を小名路（現西浅川町一三九）の宝生山金南寺を借りてここに置いた。しかし、明治二十七年十月に二十日夜、金南寺が原因不明で出火し、新政府誕生から整備してきた戸籍の原本となる身分登録簿などの書類が焼失した。火事の原因は、この時代自由民権運動の余韻が政局に著しく現れていた時でもあり、自由党と改進黨との政争が原因と噂された。ちなみに金子日記には「廿七年十月廿二日夜小名字金南寺出火、役場書類焼、村絵図面者不残出ス、廿四日串田儀八・落合与三郎式人來り、右役場書類付調整方法方ニ有志より義援金トシテ廿四五日頃金三円儀八江、

一切受取ナシ何ニヤ」この他、八王子市史、八王子市議会史、石川日記、金南寺文書、高尾山麓夜話にも記されている。



旧浅川村役場
(現、浅川地区社会福祉協議会、高尾交通安全協会)



白山神社近くの南浅川と右に旧甲州街道（廿里町）

③白山神社

廿里町四十八の一

勧請 不明

祭神 伊弉冉尊（いざなみのみこと）

創建 享徳三年（一四五四）

再建 明応七年（一四九八）

例祭 八月の第三日曜日

多摩森林科学園西側に社があり、地元では白山様と呼ばれている。数年前に桜の実験林が拡張され、境内の一部までかかったのを機会に麓の白山橋近くに社殿を新築した。

白山神社には天文二十二年（一五五三）に滝山城主大石源左衛門縄周により、本殿を造営したとする棟札が保存されている。奥社の建物は寛文十一年（一六七二）に建てられた。新編武蔵風土記稿には、十一面観音の板碑に、文永十二年（一二七五）の銘が刻まれていることから、この神社は七百三十年前の鎌倉時代には既にあったと思われる。江戸幕府より十四石の御朱印を安堵されていた。



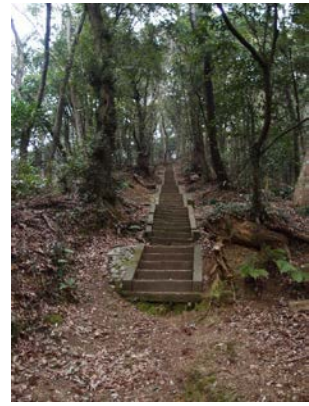
白山神社神殿



白山神社



白山神社奥伝



白山神社奥伝に行く路

④宝生山 金南寺

こんなんじ

西浅川町一三九

宗派 真言宗智山派

本尊 阿弥陀如来

開山 真源大徳

開創 貞治三年（一三六五）七月

高尾の麓、江戸三大関所の一つ甲州街道小仏の関所跡に程近い高台にある。

真源大徳がこの地を訪れた折開山し、その後安永六年（一七七八）十月、法印大空和尚により本堂の上棟式を行い、安永九年（一七八〇）十一月本寺高尾山薬王院住職秀興阿闍利大導師となり入仏、落成したと伝えられる。多摩四国八十八ヶ所霊場第六十九番札所。

この寺は高尾山薬王院の末寺で、以前は十一面観音を本尊としていたが今は阿弥陀如来となっている。本堂前のしだれ桜は見事である。

明治二十七年十月、浅川村役場が

政治的事件に巻き込まれ火災にあった際、寺もかつて大伽藍であった本堂を類焼している。山腹に本堂を移したが、昭和四十二年現在の所に新築、庫裏も改築された。

ところで寺の前に古道といわれる道がある。寺の下を流れる南浅川がその昔何度も氾濫したため、川の北側を大回りして通った最も古い甲州への道といわれている。その後、水路の改修工事が江戸時代初期から行われ、橋が架かり宿場も出来てこの道も役割を終えている。

寺の入り口に小さな観音堂がある。その下の川原が刑場跡と思われるが定かでない。または近くにある古淵の岩陰で処刑されたとの説もある。この地域の古い集落の名は小名路と呼ばれている。新編武蔵風土記稿には、金南寺の名から小名路になったと記されているが判然としない。金南寺の境内に、自由俳句を著した上田都史の句碑がある。

男地球に立ちて

夕映えにいうこと多く



上田都史の句碑



金南寺



観音様



観音堂

⑤古淵と垂井亭

西浅川町

高尾駅から甲州街道を西に歩くと、中央線の鉄橋がある。その脇を流れているのが南浅川で、街道に架かる橋を今は高尾町と西浅川町を跨いでいるので両界橋という。この両界橋の付近を古淵といい、古淵は別の名を「猯（獅子）淵」ともいわれ、昔は風光明媚な所だったと武蔵名勝図会に記されている。

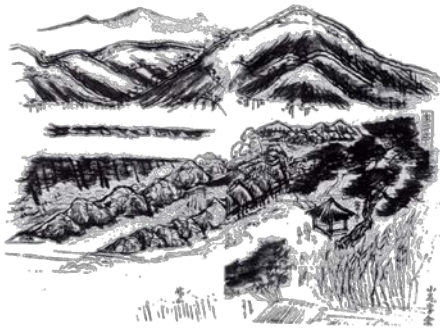
塩野適斎が著した「桑都日記」には、江戸時代後期享和三年（一八〇三）、この古淵の岸に「垂井亭」という四阿（あずまや）があったと記されている。これを建てたのは長房村の官林切出しなどを監督していた最上徳内で、避暑游憩の場所としていたという。

四阿は大工も金も使わず、端材と樹皮で作った簡素な造りながら夏の暑さをしのぎ、四季折々の風景を楽しみ文人も訪れたようだ。文政十年

(一八二七)に書かれた地誌高尾山石老山記には、垂井亭を描いた図がある。これによると、九尺四面程で、小さかったのが判る。この著者の竹村立義が訪れたところには、手直しがされ、多くの文化人の集いの場になっていた。文化人は高尾山へ向かう前にここに立ち寄り、近くの茶屋「花屋」から、酒や豆腐などを取り寄せ一服したという。垂井亭には、八王子の俳人松原庵星布の仮名文の額や塩野光迪が書いた漢文の額や聯(れん)もあつたという。

その後、垂井亭は、下原鍛冶の系譜を引く小名路出身の刀工武蔵太郎安貞の預かりとなった。この簡素な四阿がいつまで残っていたかは定かでない。

「垂井」とは、岩間から細く流れ落ちる水が銀の糸を垂らしたように見えることからその名が付けられた。しかし今は、水の流れだけがひっそりとその面影を伝えている。山紫水明の風景は遠くに去った。



獅子(猊)ヶ淵垂井亭図
国立国会図書館蔵
「高尾山石老山記より」



両界橋から見た南浅川
右岸に垂井亭があつた

⑥花屋旅館

西浅川町小名路

創業は江戸後期と伝えられている。与謝野鉄幹、晶子をはじめ、大町桂月、野口雨情などの歌人が宿泊している。また、昭和五年(一九三〇)五月、浅川駒木野出身の落合直亮、直澄の功を称えた先賢彰徳碑除幕式が執り行われた。この折、与謝野鉄幹、晶子が宿泊し、記念に書き残した掛け軸が残っている。現在、営業はしていない。



花屋旅館

●口留番所

西浅川町

小仏峠越えの旧甲州街道と新甲州街道の分岐点を小名路追分という。新甲州街道から高尾へ暫く行き、小仏川と南浅川に掛る橋を越えたところが落合である。ここに小規模な口留番所があった。

天正年間（一五七三〜九二）の関所で北条氏照や徳川家康によって甲州口の警備にあてられ裏番所ともいわれていた。

警備は旧上柵田村（現在の高尾、東浅川、初沢、南浅川）であり、当番制で村人が勤めていた。新編武蔵風土記稿によると、賃金ではなく、畑一町歩が与えられその収入により賄われていた。明治二年に廃止。かつては甲州街道沿いに小さな石碑があったが、現在は探してもみつからない。



落合橋（中心左あたり）

⑦御室社と山王社

高尾町一七七三

勧請 不明

祭神 大己貴命（御室社）

社宝 大山昨命（山王社）

創建 文政六年（一八二三）の棟札

再建 不明

創建 享和三年（一八〇三）

再建 文政六年（一八二三）

社殿は権現造である。

明治十三年（一八八〇）



御室社と山王社



御室社鳥居

山王社は勧請・創建不明だが昭和天皇ご成婚記念に建てられたもので、京王線トンネルの東辺りに鎮座していたものを、栗林を造成するため落合青年団が御室社の左へ移した。

●裕天上人の碑と石仏

高尾町

御室社の石段の下に自然石がある。それには梵字でアビラ・ウン・ケンと南無阿弥陀仏という珍しい組合せの文字が刻まれている。梵教で至上とされる大日如来を祈る真言だという。浄土宗の高僧で享保三年（一七一八）入寂した裕天上人の書といわれている。



祐天上人の碑

●トロツコ線

初沢町

御室神社の裏山一帯は岩盤になっており、特に神社の裏は人工的に大きく抉られている。碎石として関東大震災復興のため使用されたという。碎石を運ぶためのトロツコ跡が京王線の山側に僅かに残っている。



トロツコ線跡といわれている場所

⑧浅川地下壕

初沢町

むき出しの岩盤が、アリの巣状に広がる壕内はひんやりしている。崩落を防ぐため松の坑木などで補強されている。八王子市初沢町周辺に残る総延長10kmの浅川地下壕は、今も終戦時の姿をそのままとどめている。壕の一部は、「浅川地下壕の保存をすすめる会」のメンバーが年に数回一般公開している。

この浅川地下壕は昭和十九年、陸軍の倉庫として当初は掘削されたが、その後、空襲で被害を受けた中島飛行機武蔵製作所が移転することとなり、戦闘機のエンジンを作る地下工場となった。全国で戦時中に掘られた地下壕は五千ヶ所以上あるといわれるが、宅地化や自然崩落で消滅しつつある。

文化庁は、軍事に関する遺跡五十ヶ所を調査対象に選び、この八王子の浅川地下壕も指定を受けている。



浅川地下壕西側
(今はコンクリートで塞がれている)



浅川地下壕内部



浅川地下工場全体配地図



地下壕への引き込み線
昭和 21 年 3 月末米軍撮影
上部は浅川駅 (現、高尾駅)

⑨ 関東綱五郎墓之跡碑

落合地区の山麓の斜面に、狭客

「関東綱五郎墓之碑」と記された御影石の大きな石碑が建っている。碑の裏には次のように刻まれている。

「鈴木綱五郎は、鈴木家の六代目に当り祖先は甲州武田家滅亡により旧浅川村落合に移住す。文政五年（一八二二）に生れ青年期は

幕末にあたり世は騒然とし狭い浅川村に座する事が出来ず、家を出て関東綱五郎と名乗り狭客の仲間に入り遂に清水次郎長の門を叩きその客分となり、世に名を挙げ初老期に帰郷して村民の面倒を見る。当時の住居約四十五坪総樺作りの家屋を明治十年頃菩提寺の大光寺の庫裏に納め隠居し明治十九年（一八八六）十一月一日歿す。墓は昭和五十二年三月二十七日大光寺構内に移転す

八代目嗣子 医博 鈴木幸雄

実孫の夫 医博 持田治郎建之

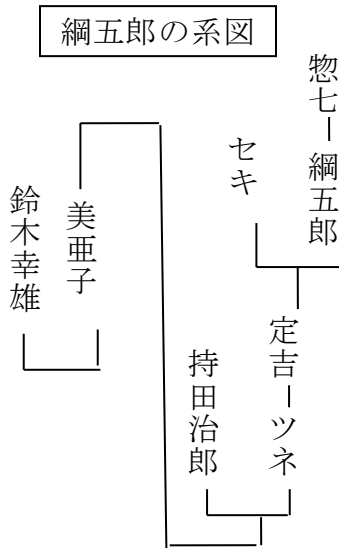
昭和五十二年七月十三日

綱五郎は上栲田村（現在の高尾町落合）千人同心鈴木惣七の子として生れる。成人し上州館林へ、のちに山本長五郎（清水の次郎長）の客分となる。荒神山で博打がもとで起こった喧嘩に大政小政らと乗り込む。後京都で火薬商を営み、その後生家へ帰る。墓は初沢町の大光寺にある。

義頭院何仙道翁居士綱之助

明治十九年十一月一日寂六十三歳

ちなみに彼は、持田治郎博士夫人故ツネさんの祖父にあたる。鈴木家には後継者がいなかったため持田家の長女美亜子夫婦を鈴木家の養子に迎えている。



関東綱五郎住宅跡



関東綱五郎墓之跡



関東綱五郎
本名 鈴木綱之助の肖像画

⑩ すぐち道と石神様

高尾町

上栲田橋から高尾方面へ暫く行くと右側歩道の脇に一・五m程の道標が立っている。明治四十一年に建てられたもので道標には、「高尾山迄本道四十四丁、ちか道三十五丁」と刻まれている。このちか道は、すぐち道といって「ろくざん亭」先の突き当たりを左へ山道を登り、金比羅台に至る道で、高尾山へ仕事に行く人達はこの道を行き帰り利用していた。道標を入って百m程先の左側に、享保十八年（一七三三）六月吉日、落合喜兵衛と刻まれた石神明神が祀られている。耳だれの病気にはあぶらげと豆腐を供えて拝むと治ったという。以前は馬の絵馬や小石が沢山積まれていたが、今は民家の敷地内にある。



石上神明（耳の病を治す）



高尾山ちか道入口



現存する八王子織物工場

●切妻造りの織物工場

高尾山のちか道入口の道標から少し入った右側にある、川村家敷地内に大きな木造建物が残っている。切妻造りの工場は機織り工場に多い平屋でこのサイズのもものは珍しい。戦後八王子織物が盛んだった頃は、織機が三十五台、ウール生地の人気があった頃は、大型織機が十台も揃えてあったという。現在は建物だけが一棟のみ残っている。

⑫坂本の子育地蔵

高尾町

昔、人がやつと入れる小さなお堂があり地蔵様が奉られていた。明治も末の雪の降る日に、赤子を抱えた巡礼が行き暮れて、お堂の中にしゃがみ込んでいた。翌朝村の人が行つて見ると巡礼は寒さで息絶えており抱えていた赤子が泣いていた。赤子は近くの家で預かっていたが預かる家も困るので村長らが相談した結果、村々を回って歩く辻芸人が来たので押し付けるように預かってもらったという。その後、誰いうとなく子育地蔵と呼ぶようになった。

子に恵まれぬ人や病弱な子の幸せを願って絵馬を奉納したり、お参りをする母子が絶えなかったという。

子育地蔵の他に、京王線工事で移動した地蔵や、はあちゃん淵で亡くなった人の供養地蔵などが収められている。



坂本の子育て地蔵

⑬ 氷川神社

高尾町二三五八

勸請 毛利備中守師親

祭神 素盞鳴尊(すさのおのみこと)

創建 応永年間

(一三九四〜一四二八)

例祭 八月の第三日曜日

京王線高尾山口駅の北側に大きな鳥居があり、奥に氷川神社がある。片倉城主毛利備中守師親が武蔵一ノ宮の氷川神社を勧請したと伝えられている。寛文二年(一六六二)七月社殿を再建、浅川町(八王子市高尾町)の総鎮守となった。江戸時代には幕府より御朱印五石を拝領していた。

古くは下梶田村大牧にあったが今の場所に移された。現在の社殿は昭和二十七年に再建されたもの。八王子市文化財に指定されている氷川神社の獅子舞は有名で、悪疫退散を祈願し祭礼に奉納されている。この獅子舞は、天正十八年(一五九〇)八

王子城主北条氏照が狭間に下賜した獅子頭をもとに奉納される。

明治五年(一八七二) 梶田村が上下に分かれ、上梶田村の鎮守氷川神社に奉納されるようになったのを受けて、上梶田村の人達により継承するようになったという。現在は、町内会の獅子舞保存会が伝統芸能として守っている。東浅川町の原町内会、会館から出発した獅子舞は土曜日の午後熊野神社で舞いなどを奉納し、翌日の午後車を利用し氷川神社に帰着。ここで再び獅子舞を奉納している。



氷川神社

⑭琵琶滝洗心地蔵尊

高尾山の清滝駅から左側に通ずる琵琶滝コースを五分ほど登ると、道の右側に洗心地蔵や七福神の像が立っている。これらの像は、信者らが琵琶滝で満願の修行を終え、記念として安置したものだという。なかでも下段中央の、御影石で造られた祠の中には、洗心地蔵尊奉納者百名以上の名前が刻まれている。韓国系の名前が殆どである。浅川地下壕で強



水川神社



洗心地蔵尊
(奉納者の名前が刻まれている)



供養石仏群

請労働させられた韓国人のなかには、戦後、祖国韓国へ帰らず、日本で亡くなった人もいた。そんな同胞の霊を慰めるため、水行で供養したと聞く。

⑮中里介山と

妙音谷草庵

高尾町

中里介山の本名は弥之助といい、明治十八年（一八八五）四月八日東京都羽村市に生まれる。彼は苦学しながら勉学に励み小学校の教員となる。明治三十年（一八九七）ごろ都新聞に入社。彼はキリスト教や社会主義に接近し、社会主義者と親交を結び平民新聞へ寄稿する。

大正十年（一九二一）高尾山妙音谷にあった佐藤旅館（今は東京高尾病院）の脇に草庵をむすび自ら竹庵と呼んでいた。しかしケーブルカー工事の騒音や落石の危険に悩まされやむなく四年後に武州御岳に移り住むことになる。

この間に「大菩薩峠」の「安房の国の巻」「小名路の巻」を執筆する。とくに小名路の巻は実際に彼が投宿したはな屋旅館であり、小説の中に

出てくる千年榿は庵のすぐ横にあった榿の大木である。

千年の名にこそ負へん
忘れじな　その年月
開山の御僧　行基
谷川の水を　酌みつつ
憩いにし　お身のほとり
今もなお　其の世の記念
樹下をゆく　縁の人に
結びとぞ　千古の契
(中里介山　千年榿の下にて)

子供が好きだった彼は地元青年を助手にしながら隣人学園という塾を作り敬天・愛人・克己の思想の下、子供たちに勉強や演劇なども教えていたという。

庵跡には石碑が建っているが、今は笹藪に覆われている。その前の登山道は、高尾山へ登る南側コースとして一番の近道として登山者には知られている。中里介山の墓は東京羽村市禅林寺にある。



中里介山の碑



妙音橋
渡った奥に中里介山の碑がある



隣人学園記念写真
後列中央が中里介山（大正 12 年）



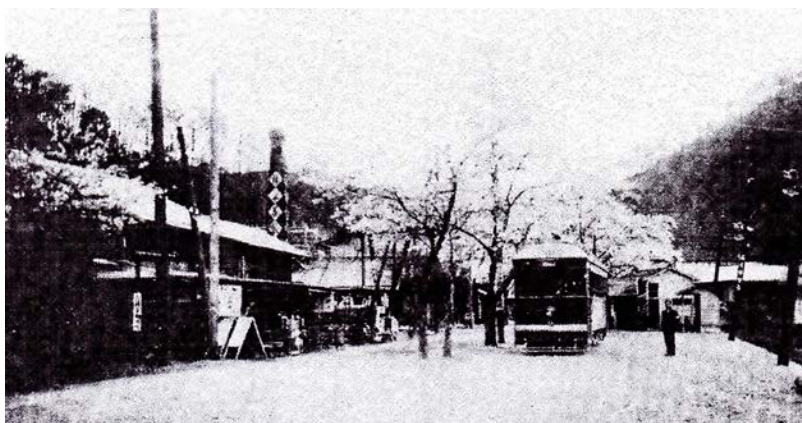
中里介山（昭和 5 年頃）



佐藤旅館（昭和初年頃の絵葉書）



妙音谷山荘（大正 12 年頃）



高尾山麓付近の武蔵中央電気鉄道 昭和 11 年（東京府史）

● 高尾山界隈の鉄道

戦前、高尾・山田辺には三つの鉄道があった。

・ 鉄道省（中央線）

昭和二年（一九二七）、皇室専用の東浅川駅を開設（大喪列車運行のため）。

※一般参拝者は浅川駅（現高尾）を利用。

・ 京王電気軌道

全車両を動員して、新宿から東八王子駅（現京王八王子）まで輸送後、八王子市街自動車（現京王バス）と提携して御陵前までシャトルバスを運行。

※のちに御陵線を開設

・ 武蔵中央電気鉄道

昭和四年（一九二九）から八王子内から甲州街道を通って多摩陵を経由し、高尾山麓を結ぶ路面電車を運行。





御陵線と武蔵中央電鉄の路線図

◎参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・武蔵名勝図絵
- ・八王子市史
- ・八王子事典
- ・八王子寺院めぐり
- ・八王子郷土資料館資料
- ・らいぶらい
- ・落合の今昔
- ・高尾界限
- ・浅川地下壕保存をすすめる会
- ・高尾山石老山記 竹村立義著
- ・府立第二商業学校卒業記念帖
- ・多摩御陵史蹟のしるべ
- ・京王帝都電鉄三十年史
- ・桑都日記 塩野適斎著
- ・高尾山総合インフォメーション
- ・八王子市議会史
- ・石川日記
- ・金子日記
- ・金南寺文書
- ・高尾山麓夜話 設楽政治著
- ・昭文社

- ・ア製造厩綜合配置計画図
(設楽政治提供)
- ・八王子市地図
- ・八王子市観光マップ
- ・インターネット各ページ